

証聖者マクシモスにおける終末論と神化

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	38
ページ	47-64
発行年	2000-10-20
その他のタイトル	Eschatology and Deification in St. Maximus Confessor
URL	http://hdl.handle.net/2241/9936

証聖者マクシモスにおける終末論と神化

秋 山 学

I 序. マクシモスの生涯と著作

証聖者マクシモス (A. D. 580-662) の中心思想は「神化」(theôsis) であると言われる¹。マクシモスの終末論と「神化」の関係を明らかにすることが本稿の課題である。

マクシモスの神学は、キリストの人間の意志をめぐる単意説論争に原点を有している。そしてこの論争を理解するためには、当時の時代背景にある程度通じておく必要がある。そこで、簡単に彼の生涯と時代とを辿っておくことにしよう。マクシモスは580年の生まれであるが、生地についてはコンスタンティノポリスとする説とガリラヤ地方とする説がある。成人していったんヘラクレイオス帝 (610-641在) の筆頭書記官 (asekretis) を勤めた後、614年にはコンスタンティノポリス近郊のクリュソポリス修道院に入ったが、626年以降、ペルシアの侵入とともに流浪の旅に出る。結局アフリカのカルタゴに落ちつき、そこで反単意説論者ソフロニオス (560-638; 後にエルサレムの総大主教 (634-38在)) の下にあった。単意説 (monothelism) とは、キリストには、その神人両性にともなって二つの意志が存在するのではなく、ただ一つの神的な意志がある、とする説である。

この説が登場する背景には、7世紀におけるビザンティン帝国の東方諸勢力との闘争がある。アルメニア、シリア、エジプトなどのキリスト教徒は、キリストにおける神人両性を規定したカルケドン信条を拒んでなお単性説 (monophysism) を奉じ、ペルシアの支配下で恵まれた地位を享受していた。単性説とは、キリストのペルソナにおいて人間の本性は唯一の神の本性にいわば吸収合体され、従ってキリストはただ一つの神的本性を有する、とする説である。これに対してヘラクレイオス帝は627年にニネベでペルシア軍を破り、単性説キリスト教徒たちをカルケドン信条に従わせようとしたが、成功しなかった。

一方コンスタンティノポリス総大主教セルギオス I 世 (610-638在) は、カルケドン派と彼らとの妥協案の一つとして、まず単勢力説 (monoenergism) を宣伝し、効果が上がらないと見るや、次いで単意説を考案した。638年、皇帝ヘラクレイオスはセルギオスの起草した勅令「エクテシス」を公布し、キリスト単意説を擁護する。これに対して、マクシモスはカルケドン公会議の決定に従い、キリスト両意説を唱えた。一方単性説論者たちは勅令をカルケドンのであるとしてなお拒否、その間にイスラム勢力が近東一帯を勢力下に収めてゆくことになる。

649年、ローマ教皇マルティヌス I 世 (649-53在) は、ラテラノ教会会議において単意説を排し、マクシモスもマルティヌス I 世を支持した。これに対して皇帝コンスタンス II 世 (641-666在) は653年、ローマにてマルティヌスを捕らえ、クリミア地方への流刑に処した。マクシモスもこのとき捕らわれてコンスタンティノポリスに移送されたのち、655年、トラキアのビズュエに、次いで662年にはラヅィカに追放となり、当地にて没する。このとき彼の舌と右の手が切り落とされ、それが彼の信と聖性を証しするものとなり「証聖者」という呼称が生まれた。

のち680年のコンスタンティノポリス公会議においてマクシモスの両意説が正統とされ、カルケドン信条が改めて確認されることになる。この公会議の決議は次のようなものであった。

「われわれは…聖なる教父たちの教えに従い、キリストの内には、二つの生来の意志と二つの生来の勢力とが、分割・変化・分離・混同することなく存在することを宣言する。この二つの生来の意志は…互いに相反することがない。キリストの人間としての意志は、神の全能の意志に従った。そして、抵抗したり反対したりせず、むしろ従属しているのである」²。

思想史の上でマクシモスは、オリゲネス (184-253)、ニュッサのグレゴリオス (335-394)、エウァグリオス・ポンティコス (345-399)、マカリオス (380-430頃)、偽ディオニュシオス・アレオバギテス (6世紀?) といったギリシア教父たちの神学を集大成し、ギリシア教父神学史上最後の独創的な神学者として、またエリウゲナ (810-877) を通して西方世界に影響を及ぼした人としてその名を留めている³。

また彼の著作としては、修道生活の実りとも言うべき『愛についての四百の断章』(*Capita de charitate*)、ほぼ同じ形式による『知識に関する二百の断章』(*Capita gnostica*, c. 630-634)、『神学と経倫についての五百の断章』(*Diversa*

capita ad theologiam et oeconomiam spectantia deque virtute et vitio). 「神学と論争の小品集」(*Opuscula Theologica et Polemica*), 「質疑」(*Quaestiones et Dubia*), 「修道論」(*Liber asceticus*). ナジアンソスのグレゴリオスと偽ディオニュシオス・アレオパギテスの著作における諸問題を解説した「難問集」(*Ambigua ad Johannem*, c. 628-30)などの他、東方典礼の象徴的意味を説いた「奉神礼の奥義入門」(*Mystagogia*, c. 628-30)、聖書解釈書として「詩篇五九について」(*Expositio in Psalmum LIX*)および「主の祈りについて」(*Orationis Dominicae expositio*, c. 628-30)、量的に最も人著である「タラッシオスに宛てた諸問題」(*Quaestiones ad Thalassium*, c. 630-33)、それに四五通の「書簡」(*Epistulae*)などが現存している。

本稿では、彼の終末論を「神化」の問題と関係づけ、これを彼の旧約聖書注解テキストにおいて明らかにしたいと考える。

II マクシモスによる「楽園の木」解釈

本論の起点として、オリゲネス主義的「アポカタスタシス」(終末時の悪魔救済説)に対するマクシモスの補正と考えられる一節を取り上げてみたい。

a) 「〔アポカタスタシスの〕三つ目は、かのニュッサの聖なるグレゴリオスが著作の中でしばしば言及しているものであるが、それは、罪に陥った魂の諸々の力が、創造されたその本来の姿へと再び遂げる復興である。というのも復活の際に全本性は、長らく待ち望んでいた肉の不滅を受け取ることになるはずだからである。それと同様に、〔罪に〕堕ちてしまった靈魂の諸々の力は、世々を経るうちに、自らに刻み込まれてしまった悪の記憶をぬぐい取るはずである。そしてあらゆる世代を通り過ぎ、留まる場所 (*stasis*) を見ださないままに、神のうちに至る。神は限界 (*peras*) を有さない方である。こうして善への与り (*methexis*) によってではなく、認識 (*epignôsis*) のうちに、靈魂はこれら諸々の力を受け取り、始源の姿へと復興され、創造主は罪の原因ではないということが示される」(*Quaestiones et Dubia* 19, CCSG10. 17-18)。

ここには *methexis* と *epignôsis* の対比があり、後者は、アレクサンドリアのクレメンス (150-215) からさらにパウロに遡る終末的一致の場としての概念であると言える⁴。*epignôsis* は当然のことながら *gnôsis* と密接な関連を有し、「創世記」冒頭に記された園にある一本の「善悪の知識の木」のイメージを担っている。

以下、マクシモスによる『創世記』当該箇所に関わる言及を取り上げて考えて見たい。まず『創世記』二八以下（以下ギリシア語訳旧約聖書）のテキストから検討することしよう。

「8）主なる神は、東の方のエデムに園を備え、そこに自らが創った人を住まわせた。9）そして神はさらに大地から、目で見ると麗しく、食するに善いすべての木を生えさせ、また園の中央には生命の木と、善美と悪の知識の木(*xylon tou eidenai gnôston kalou kai ponêrou*)を生えさせられた」。

また、同じく『創世記』二五以下には次のように記されている。

「15）主なる神は、自らが創った人を連れてきて、彼を園に住まわせ、彼が園を耕し守るようにさせた。16）主なる神はアダムにこう言って命じた。〈園の中にあるすべての木から取って食物として食べなさい。17）ただし善美(*kalon*)と悪(*ponêron*)の知識(*ginôskein*)の木からは食べてはならない。その木から取って食べた日には、死ぬことになるだろうから」。

H. U. フォン・バルタザールは、マクシモスが「沈黙をもって尊重する」としつつアポカタスタシス論に言及した箇所（3箇所）が、いずれもオリゲネスの『ヨシュア記講話』に典拠を有するとした³。そのうちマクシモスによる『タラッシオスに宛てた諸問題』の序文には次のような記述が見られる。

b) 「おそらく善悪の知識の木(*xylon gnôston kalou kai ponêrou*)とは、可視的被造物のことであり、真理から遠く隔たつてはいないであろう。というのも〔この木は〕快樂と苦痛を本性的にもたらす参与(*metalêpsis*)を有しているからである。

あるいは別解として。被造物は可視的事物の、靈的かつ精神を養う理を有しているが、本性的力をも持つ。それは感覚を喜ばせ、精神を歪める。この被造物が善と悪の知識の木と名付けられている。靈的に見られると美の知識(*gnôsis*)を有するが、肉体的に捉えられると、悪の知識を〔授ける〕。つまりこれに肉体的に与る人々には、情念の師となり、彼らに神的な事物の忘却をもたらす。それゆえに神は人間に対して、その実を取って食べることを禁じたのである。これは〔キリスト〕以前は、いとも正しきことであった。だが恩寵(*charis*)における与り(*metochê*)によって固有の理を認識し(*epignous*)、恩寵(*charis*)によって与えられた不死性(*athanasia*)を、そのような参与(*metalêpsis*)によって無情念また不惑へと固めるならば、〔人は〕神化(*theôsis*)によって神となり、咎められることも羞恥の心もなく、神とともに神の被造物を眺め、それらに関する知識(*gnôsis*)を獲得するであろう。人としてではな

く、神として、恩寵 (charis) により、諸事物に関して神と同じく知恵を伴った理解 (meta sophias eidêsis) を、精神と感覚との神化 (theôsis) への変容によって有することになるのである」¹⁰。

ここには「恩寵における与り (metochê)」による「固有の理の認識 (epignous)」といった表現が認められる。加えて「恩寵」(charis) という語彙が繰り返し用いられる。マクシモスの神学における中心的主題となる「神化」(theôsis) は、「恩寵による」という規定句を伴う場合がほとんどである。マクシモスにおいて、この「恩寵」とは具体的にはキリストの受肉を指し、この受肉の結果、人間の神化が実現するとされる。人間の神化とキリストの人間化とが同一軌跡上にあるということは、マクシモスの著作の中で度々強調される中心的主題である。

この地平は人祖アダムと新しき人キリストとの対比において語られる。

c) 「ちょうどアダム、すなわち不従順により、快樂による誕生の法と自らを通して断罪された本性の死を被った者を通じて、人はみな自らの存在を、快樂による誕生の法に従って獲得している。それ故必然的に、そしてたとえ望まずとも、可能態において誕生に結びつき、本性的に裁かれた死を身に受けている。こうして、快樂による誕生の法が本性を支配している限りにおける、本性の死を断罪すべき時が来た。

まさしくそれと同じように、キリストを通して、すなわち快樂による誕生の法を本性からまったく解き放つ方、自らにより裁かれた本性の死の使用を、ただ罪の断罪のためだけに意志を通して受け取られた方を通して、キリストにより生まれる者はみな、その望みにより、洗礼による再生を通じて霊において生まれ変わる。そして快樂によるかつてのアダムの誕生を、恩寵 (charis) を通して廃し、洗礼における罪のなさという恩寵 (charis) と、霊における神秘的子化 (hyiothesia) の、消え去ることなく汚されることのない力を、福音の掟の法によって維持し、罪に対する断罪を、死に向けて働かせるために相応しくも維持する。彼は肉においては罪を断罪する時機を有する。それは、普遍的な意味また本性の上では、恩寵による人間化という偉大なる神秘を通してのまさしくロゴスの肉化の時である。一方固有の意味でまた動きの上では、各自がそれ以来、子化 (hyiothesia) の恩寵を洗礼によって得た時を指す」¹¹。

このような恩寵による神化を通して、旧約の「善悪の知識の木」の禁断に象徴されるような「死」を克服し、不死性を獲得した人類が、終末に普遍的な一致を獲得するというのがマクシモスの終末像だと解せよう。

Ⅲ マクシモスにおける恩寵と神化

一方 methexis の用例として、マクシモスの『書簡』には次のような一節が見られる。

d) 「われわれの救済のために、彼〔キリスト〕はわれわれの善行を喜びとする。ただ一人何にも欠けていないこの方は、われわれに対して、何であれ誠心からわれわれに約束したことを与える。これらこそ「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛するものたちに準備された」(1コリ2. 9)ものである。神がわれわれを創造されたのは、われわれが神的な本性の共有者 (koinônoi) また彼の永遠性の参与者 (metochoi) となり、恩寵 (charis) に基づく神化 (theôsis) によって彼に似た者となるためである。その神化を通して、全存在の存立と永続があり、非存在の創造と生成が存する」⁸⁾。

この一節の背景には「ペトロによる第Ⅱ書簡」『自らの栄光と徳 (aretè) によりわれわれを招く方を認識させること (epignôsis) を通して、イエスの神的な力は、生命と敬心に関わる事柄すべてをわれわれに賜った。そしてその栄光と徳によって、われわれには尊く偉大なる約束が与えられた。それらを通して、われわれがこの世における欲情のうちなる腐敗を逃れ、神的な本性の共有者 (koinônoi) となるためである』(2ペトロ1. 3-4) が伏在している。

先に引いた「タラッシオスに宛てた諸問題」(b)からの一節には、「恩寵 (charis) のうちなる参与 (metochê) によって相応しき原因を知り (epignous)、恩寵によって不死性を獲得する」とあった。マクシモスにとって methexis とは、恩寵による神化のうちに属するものである。この methexis は、さらに最高の段階である epignôsis にまで高められる際のエネルギーを形成する。以上から、マクシモスにおける methexis とは、agapê が gnôsis に仕えるべき存在であると同じように⁹⁾、さらに高次の epignôsis へと開かれていなければならない存在だと言える。もっとも charis は methexis, epignôsis 双方の次元を覆い、人間が全人的に不死性を獲得するまでの道程を保証する。

マクシモスの抱く終末像をうかがわせる一節として、『難問集』には次のような箇所がある。この箇所には「アナケファライオーシス」(再統合)論が語られる。

e) 「来たるべき世にあっては、人類は完全にロゴスにならって創られ、その像を完全なかたちで自らのうえに宿す。欠損の痕はまったく残らず、われわれ

とともに、われわれを通して彼〔再臨のキリスト〕は、全被造物を自ら自身の肢体であるかのようにその中央に抱く。そして自らの周りに、楽園と世界・天と地・感覚界と知覚界を放ちがたく結び付ける。なぜなら彼自身が肉体・感覚・靈魂・精神をわれわれと同様に有するからである。おのおのを肉体の四肢として極限まで適合させた後、彼は万物を神的に自らのうちに復興させる (anakephalaiôsatō)。万物が一つの、あたかも一人の人間であるかのように」¹⁰⁾。

ここでは、終末時における万物の一致の姿が、一人の人間になぞらえられて語られている。「ロゴス」が「全被造物を自ら自身の肢体であるかのように」抱き、異種の要素を有する様々な次元のものを、統合的に復興させる。マクシモスの考える終末像が、異端的オリゲネス主義のような靈の実体とされない点、彼の正統性を実証する点であろう。つまりマクシモスにあっては、人間性の次元、換言するならば肉体のレベルが、終末時における神化・統合・一致の場として捉えられているのである。

こうして、キリストにおける完全な人性という理念がマクシモス神学の核をなす。それが人間の神化をも可能にする。これこそ人間創造の最終的目標である。小宇宙としての人間という考えは、創造の究極目的の中間点を成す。人間の義務は、墮罪によって中断されたが、精神、靈魂、肉体の三分された状態を克服し、神の像という道を通して神の似姿にまで変容することである。その際、人間性の顕れとしての人間の意志は、人間が神に向かって上昇する時に決定的な役割を果たす。人間の意志に究極まで自由な選択を与えるという点で、彼は安直なオリゲネス主義とは袂を分かっている。

マクシモスにとって、神自身の計画が関与している限りにおける歴史の到達点とは、明らかに、人類全体の救済およびあらゆる被造物の自らの一致である¹¹⁾。人間にとってこの一致とは、肉の復活による不滅の生命の獲得ばかりでなく、肉体・精神・意志の完成、すなわち「自由意志と選択の諸機能の変容」を意味する。この復活は、全被造物の変容の一部である¹²⁾。この終末論的刷新の中核は神化である。「そこにおいて神は神々となったものどもと一致し、万物をその善性によって自らのものとする」¹³⁾。神は自らの信篤き被造物の現実を完全に貫く。

さらに、マクシモスによる恩寵の理解を示すものとして、次のような記述がある。

f) 「神は万人に対し、まったき姿で分有される。まさしく靈魂を備えた肉体

における靈魂のように、靈魂を媒介として肉体に臨むのである。かくして靈魂は不変の質を帯び、肉体は不死性 (athanasia) を獲得する。こうして全人間は、人間の姿を取った神 (enanthrôpêsantos Theou) の恩寵 (charis) によって神化の働きを受け、神化される。すなわち本性的に、彼は靈魂と肉体においてまったき人間として留まりつつ、靈魂と肉体において恩寵によりまったき神となる。この恩寵とは至福なる栄光の、彼にまったく相応しい神的な輝きであり、これを措いて何かより輝かしきもの、より崇高なものを考えつくことができないほどである」¹⁴。

マクシモスのこの発言の背景には、彼の正統的両意説がある。すなわち、アンティオキアを中心とする〔ネストリオス的な〕伝承の中ではキリストの人性が過度に強調された。けれどもそれによって、逆に単性説などの勃興によりキリストの人間性が神的エネルギーに属するという側面が強調されるに至った。これに対し、そのような神化にも関わらず、キリストの人間性は自己自身の属性を喪失することがなく、これと類似した仕方で人間も神化される、とマクシモスは主張したのである¹⁵。

またこの一節 f) において注目したいのは「不死性」という語彙である。これは先に b) にも現れたものであるが、ここでは、人間が恩寵によって神化された結果として、肉体が獲得する性質として規定されている。マクシモスにあってその根拠は、他ならぬキリストの受肉という事実である。

IV マクシモスによる祈りと神化

ところでマクシモスは、ビザンティンからロシアへの靈性史の上で重要な『フィロカリア』にもその名を留めている。「イエスの祈り」あるいは「心の祈り」と呼ばれるこの祈りの伝承は、「主イエス・キリスト、神の子、罪人なるわたしを憐れみたまえ」との祈りを繰り返すもので、イエスの御名に内在する神性が祈る者を神化するという教説となって伝えられる。そして祈りに専心する者は、ちょうどイエスが弟子たちに、タボル山上で変容を遂げ栄光に満ちた姿を顕した時 (マタイ17) と同じ光に包まれると言われる。

マクシモスは、七世紀の東方教会ですでに伝承となっていたこの「絶えざる祈り」の系譜の源流に位置するとも評される¹⁶。実際マクシモスの著作には、祈りに関する言及が頻繁に認められる。

例えば次のように語られる箇所がある。

g) 「祈りの目的 (skopos) とは7つある。それは、①神学 (theologia) ②恩寵のうちに子となること (hyiothesia) ③天使に等しくなること (isotimia) ④永遠の生命に与ること (metochê) ⑤苦しみを被らずに本性を回復すること (apokatastasis) ⑥罪の法の根絶 (katalysis) ⑦欺瞞によってわれわれを支配する悪の斥政の掃討 (kathairesis) である」¹⁷。

ここには「与り」(metochê) という語彙が「永遠の生命」との関連で用いられている。「永遠の生命」とは、内容的に、前項に見えた「不死性」と異ならないであろう。また「恩寵」において与えられる次元とは、キリストが受肉において取った状態に等しく「子化」(hyiothesia) の地平である。

祈りと神化の関係については、さらに次のように語られている。

h) 「祈りの目的は、われわれを神化の神秘 *mystêrion* に向けて導き、神の御一人子の、肉を通しての無化がわれわれをいかなることから遠ざけるか、そしてどこからまたどこに、彼がその憐れみ深い手の力によって、宇宙の最下部に達したわれわれのうちの者をもいかに罪の重荷から引き上げるか、を知ることができるようにすることでなければならない」¹⁸。

祈りの目的とは、マクシモスによれば、このように神秘 *mystêrion* の体験としての「人間の神化」である。彼はこの祈りにおける恩寵の介在を説く。

i) 「兄弟が言った。(師父よ、教えてください。いかにすれば祈りがあらゆる想念から精神を守りうるのでしょうか)。老師が答えた。(想念とは事物に関する想念である。この事物のうちあるものは感覚に訴え、あるものは精神に訴える。精神がそれらの事物のなかで徘徊すると、それらの事物の想念を弄ぶ。しかし祈りの恩寵 (charis) は、神に精神をつなぎ止める。そして祈りは精神を神につなぎ止めることによって、あらゆる想念から精神を引き離す。そのとき精神はありのままの姿で神に語りかけ、神の如き姿になる)」¹⁹。

以上のように、マクシモスの「祈り」の論の展開の中に charis, metochê, apokatastasis, hyiothesia といった彼の神学的に重要なモチーフが現れる。上述した「イエスの祈り」のうちに究極的に遭遇しうる「タボル山における変容のキリスト」²⁰ は、人間神化の究極的な姿だと考えられよう。この「変容」の場面について、マクシモスは『知識に関する断章』や『難問集』のなかで言及している²¹。キリストが放ったこの「変容の光」は、マクシモスにあっては聖書において御言葉が放つ光に同化される。「イエスの顔は太陽の如くに輝き、その衣は光のように真っ白になった」(マタイ17, 2) という箇所をめぐる、マクシモスは「主の白く輝く衣は、至聖なる書の言葉の象徴を担っている」²²

とし、さらに次のように語っている。

j) 「神の言葉がわれわれのうちに輝き光を放ち、その御顔が太陽のように眩く照るとき、彼の衣も光を放つ。すなわち聖書の福音の明るく明晰な言葉が、いまやその覆いをはぎ取られる。するとモーセとエリヤが彼の傍らに立つ。すなわち律法と預言者のより霊的な意味が明らかとなる」²³。

V マクシモスの聖書観

上に引いた一節においてマクシモスは聖書の言葉をキリストの「衣」と解し、「律法と預言者」すなわち旧約聖書が、イエスの放つ光によって照らされるものと解している。マクシモスの聖書観について検討しておくことが必要であろう。

マクシモスの聖書観を知る上で参考になるのは、東方典礼の神秘的奥義を明らかにした『ミュスタゴーギア』である。その第六章は「聖なる書は、どうしてまた如何にして、人間であると言われるのか」と題されている。マクシモスは「師父」の言葉を引用して「師父は、高められた観想において教会が霊的な人であり人が神秘的な教会であると言われるのとちょうど同じように、聖書全体が全体として人である、と言うのを常としていた」と述べ、「ちょうど旧約が肉体に、新約が霊また精神にあたる」とする²⁴。彼はさらに次のように述べている。

k) 「師父は、聖書全体、旧約と新約のなかで歴史的な文字が肉体であり、文字の意味とそれが向けられている目的が靈魂である、とも言っていた。．．．ちょうど人である我々自身が見えるものに関しては死すべき存在であり、見えないものにおいては不死であるのと同じように、聖なる書は、たしかに外見上は書き物であり、過ぎ去り行くものを含んでいる。だがその書き記された文字のなかに隠された息吹は、決して存在を止めることはなく、観想のロゴスを真なる形で構築しているのである」²⁵。

このように聖書を人間的存在と見なす神学は、古くはオリゲネスに遡る²⁶。マクシモスはオリゲネス的聖書観を「知識に関する断章」においても展開し、旧約をさらに律法と預言者の部分に分ち、福音と各々の関係を次のように表現している。

l) 「律法は聖書すなわち霊的な人間の肉であり、預言者は感覚、そして福音は霊的な靈魂である。律法の肉体と預言者の感覚を通して靈魂は動的になり、

自らの力をその活動において表現するのである」²⁷。

またマクシモスはオリゲネスに倣い、型 *typos* の他、影 *skia*、像 *eikôn* といった語彙を用いて新約と旧約の関係を表現している。

m) 「影と像と真理のうちに、われわれのための救いの神秘の全体が思慮深く配されている」²⁸。

n) 「影とは旧約に属し、像は新約に属する。しかるに真理とは、来たるべきことどものあり方である」²⁹。

o) 「福音に含まれる神的かつ霊的な恵みの、律法は陰、預言者は像である。福音はそれ自身、われわれに、この真実をあらわしてくれる。それは聖書を通してわれわれに現存する。それは今まで律法の影のうちに覆われ、預言者によって予表されていた」³⁰。

「神秘」という語彙との関連で注目されるのは、旧約の「文字」が新約の「恩寵」によって刷新されるだけでなく、すでにその恩寵は旧約の文字のうちに隠されている、とする次の一節のような理解である。

p) 「新しい契約の恩寵 (*charis*) は、神秘的な仕方で旧約の文字のうちに隠れている。これこそ使徒が〈律法とは霊的である〉(ローマ7, 14) と語ったことである。こうして律法は古くされ文字によって無用のものとされるが、霊によって若く完全に動的なものとなる」³¹。

さらにマクシモスは、モーセとエリヤがタボル山上でキリストとともにあったように、肉体に相当する旧約部分が、その光の許に一化する次元を目指している。

q) 「旧約は、肉体をして靈魂のレベルへと超え行かしめ、精神が体のレベルに貶められることがないようにする。新約は精神を、愛の火でもって、神へと上昇させる」³²。

VI 「体化」をめぐって

前二節において確認したように、マクシモスは、祈りにあつては靈魂と肉体の聖化、特に肉体を含めた人間の神化を目指し、聖書解釈においては、新約すなわち恩寵の光による、旧約部分の聖化および霊による文字の聖化をめざしている。旧約は霊である新約に対して、また文字は霊に対して肉体に相当するため、祈り・聖書解釈両方の行為においてマクシモスの方向性は一致している。さらにマクシモスは、神の恩寵が受肉というかたちで既に明らかになっている

以上、その恩寵を秘めている旧約のテキストすらもすでに聖化されているとしている。このような意味において、マクシモスは究極的な終末こそキリストの再臨の時点に置いているけれども、キリストの受肉を経た現在、旧約も、人間の肉体も、そして文字も、あらゆるものがすでに恩寵を表明している、と解していると言える。

マクシモスの著作に特徴的な語彙として、「体化」(ensômatôsis)という表現が「神秘」とともに用いられているのが認められる。

r) 「神の御言葉と神とは、自らの体化(ensômatôsis)の神秘(mystêrion)が実現される(energeisthai)ことを常にそしてあらゆる人において望んでいる」³³⁾。

また、次のような一節は、モーセに対する神からの律法版の授与のうちにキリストの受肉を見る、ニュッサのグレゴリオスの理解に連なるものを持つ³⁴⁾。

s) 「神の言葉はその十の律法のうちに隠されており、実行(praxis)を通してわれわれとともに降下し(synkatabainôn)われわれのうちに体化(sômatoutai)する」³⁵⁾。

「御言葉」の「体化」という状況は、ロゴスの受肉・人間化と軌を一にしている。この方向性と、前二節において確認したマクシモスの神学とを比較してみると、祈りあるいは聖書解釈において、主体が「タボル山の光」によって表されるイエスの神性を内在させることで、これらの行為の方向性はロゴスの向かう方向性と一致するものと理解される。

聖書を人間と見なすこととも関わり、マクシモスは教会(ekklêsia)さらには世界をも一人の人間と見なす。「ミュスタゴギア」第四章は「神の聖なる教会は、象徴的に人間を像とし、教会は人間により人間として像とされること」、第五章は「神の聖なる教会は、それ自体が思惟される靈魂の似像また型と呼ばれること」と題されている。さらに第七章「世界は人間と呼ばれ、また人間は世界と呼ばれること」において、マクシモスはこう述べている。

t) 「[師父はこう語った]。〈全世界は見えるもの見えざるものから成っているが、人間である。逆に、肉体と靈魂から成っている人間とは、世界である〉。知覚しうるものは靈魂の意味を果たすと同様、靈魂は知覚しうるものの意味をもつ。そして感覚しうるものは肉体の意味を有し、肉体は感覚しうるものを表す。[師父は続けた]。〈知覚しうるものは感覚しうるものの靈魂であり、感覚しうるものは知覚しうるものの肉体である。靈魂が肉体のうちにあるのと同様、知覚しうるものは感覚の世界のうちにある。感覚しうるものが知覚しうるもの

によって維持されると同様、肉体は靈魂によって維持される。知覚しうるものと感覚しうるものの双方が一つの世界を構成するのと同様、肉体と靈魂が一人の人間を構成する)」³⁶。

VII マクシモスの『ヨナ書』解釈

以上から、マクシモスの説く神化とは受肉の恩寵に根ざし、まずその究極目標は肉体・人間性の完全な聖化と統合であることが理解された。またそれは旧約・新約から成る聖書テキストの次元にも適用され、マクシモスによれば、旧約の文字が新約の恩寵によって輝きを与えられるばかりでなく、旧約テキストのうちにもすでに恩寵の到来を見出しうる、ともしうるということが理解された。

このようにマクシモスの理解がほぼ明らかになったので、今度は彼の予型論的解釈に関わるテキストを取り上げてみたいと考える。彼の『タラッシオスに宛てた諸問題』の第六四問を見よう。ここでは、旧約聖書『ヨナ書』をめぐる、マクシモスの予型論的神学をうかがわせる興味深い解釈が展開されている。「さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ」（ヨナ3、2）との神からの命を受けた預言者ヨナは、一旦はその召命を拒んでタルシシュに逃れようとするが、その途上船が嵐に逢い、船員たちにより海に投げ込まれる。ヨナは大魚の腹の中で三日三晩を過ごし、神に祈りを献げた後、陸に上げられる。再び神の命を受けてニネベに赴いたヨナは、「さらにもう三日経てば³⁷、ニネベの都は滅びる」と告げながら、ニネベの市民に悔い改めと神への立ち返りを勧告する。ニネベの人々は彼に従い、神は下そうとしていた罰を思いとどまる。

『ヨナ書』は言うまでもなく、キリストが自らの「三日目の復活」を予示するものとして引用した預言書である（cf. マタイ12、40）。ヨナがニネベの人々に立ち返りを呼びかけて語った『ヨナ書』34の言葉に、マクシモスは特に注目する。この箇所本文は、ヘブライ語テキストとギリシア語七〇人訳テキストでは異なっている。まずヘブライ語原典では、

wayyômar 'ôd' arbâ'im yôm wê nîn'wê nehpa'ket :

「ヨナは言った。〈さらにもう四〇日経てば、ニネベの都は滅びる〉」
となっているが、ギリシア語七〇人訳テキストでは

kai eipen Etî treis hêmerai kai Nineuê karastraphêsetai.

「ヨナは言った。〈さらにもう三日経てば、ニネベの都は滅びる〉」

となっている。ヘブライ語テキストで「四〇日」とあるのが、ギリシア語訳では「三日」に変わっており、マクシモスもこのテキストに従っている。マクシモスはこの「三日」という点に注目し、ここから神学を展開する。次にマクシモスが注目するのは、ギリシア語の *eti* (ヘブライ語では *'ôd*) 「さらにもう」という副詞である。それでは当該箇所少し前からマクシモスの本文を訳出することにしよう。

u) 「われわれは霊的に、信仰と信に伴う義を通して、霊的なニネベを迎えよう。ニネベとは異邦人の集い (*hê ex ethnên ekklēsia*) の謂であろう。この町は真に〈神にあって大きな町であった〉(ヨナ 3, 3) と記されている。われわれは、この町の立ち返りのために定められた三日間を通しての回心によって救われ、回心とより大いなるものへの変容によって、〈神にあって大きな〉この町の民となるように努めよう」³⁶。

マクシモスはまず、この箇所でニネベが〈神にあって大きな町〉と記されていることに注意を促し、イェルサレムとの比較において「わたしは聖なる書全体をしばしば読み返したが、どの箇所にも〈神にあって偉大な町イェルサレム〉と記されているのを見いだすことはできなかった」と語る³⁷。マクシモスにとって、「われわれ」が集い、そこに属すべき場 (*ekklēsia*) は、異邦人の都でありながらも回心により「神にあって大きな町」と呼ばれているニネベに同一化されているのである。この点にまず注目しておきたい。マクシモスはこう語る。

v) 「わたしはこう思う。すなわち預言者は、鯨の腹のうちにある間に、まず予型的に三日間を自らのうちに取り込んで、三日間に及ぶ主の埋葬と復活とを前もって描き出した。御言葉はその三日間の後に来る〈別の〉三日間を含意しているのであろう。この三日間とはすなわち、その間に真理の光が明らかにされ、前もって語られた諸々の神秘の真なる成就と、町の完全なる滅びが実現する日のことである。御言葉はもはや、救い主の埋葬と復活という真理 (*alētheia*) を来たるべきものとして、予型的に語る (*protypousas*) のではなく、真理が出来事 (*pragmata*) において生起したものであることを明らかにする。ヨナによって予め鯨の腹の内でも経過された三日間とは、その真理に先立つ予型 (*prodiatypōsis*) なのである。予型 (*typos*) とは総じて、予期される真理に関わる。しかるにヨナは鯨の腹の内でも三日間を予型として過ごした。神秘 (*mysterion*) が、出来事として (*pragmateiōdōs*) この予型に続く真理 (*alētheia*) を、まったく新しい仕方でも (*pantōs kainoprepōs*) 表現しようとしたことは

明らかであろう。〈その真理とは〉すなわち主が、自ら語った「ヨナが三日三晩鯨の腹のうちにいたように、人の子は大地の中に三日三晩いることになるだろう」(cf. マタイ12, 40)という言葉どおり、三日三晩を大地の中で過ごした (pepoiêkenai) ということである」³³。

マクシモスは続ける。

w) 「〈さらに (eti) 三日間〉という表現は、すでに別の三日間が過ぎ去ったということを含意しつつ示している。なぜならもしそうでなければ、eti 〈さらに〉という語は用いられなかったであろうから。すなわちこれは〈もう一度三日間が過ぎれば、ニネベは滅びるであろう〉という意味なのである。かくして、神の決定のゆえに予型 (typos) がニネベを滅ぼすというのではなく、それを行うのは真理なのである。すなわちヨナは真理について (peri), 〈さらに三日間〉つまり〈わたしにおいて示された、より神秘的な埋葬とより大いなる復活のための予型の後、さらに三日間が過ぎれば〉、ニネベは滅ぼされるであろう、と言っているのである」³⁴。

上の一節では、P. M. ブラウワースが指摘するように、①ヨナが鯨の腹のなかで過ごした三日間 ②ニネベが滅ぼされる前の三日間 ③救い主が埋葬と復活の間に地下にて過ごした三日間 の三種が区別されている³⁵。マクシモスの理解では、①は③の「予型」 typos であり、③は現実の出来事のなかで実現した真理である。この箇所では、「真理」はキリストの死と復活という「出来事」として「実現」するものと理解されている。彼の視点はあくまでも現在聖書を読む「われわれ」の場に設定され、その上で②が「より神秘的な埋葬とより大いなる復活」のために「まったく新しい仕方」で示される三日間、すなわち「神秘」であると述べられる。

マクシモスによれば、ヨナの言葉がニネベの人々を回心させうるだけの力を有する「神秘」となっているのは、まず彼自身がキリストの死と復活の予型となる体験を経ているためである。彼の体験が「予型」とされる際、そこにはすでに「真理」が働き、原型たる「真理」からの逆照射が行われている。それを前提とするとき彼の言葉は、当時のニネベの人々を越え、「旧約」の枠を越えてさらに聖書を読むわれわれにも働きかけてくる。このダイナミズムこそが「神秘」なのであって、その根底には事実である「真理」が存在する。すなわち、ここで語られている神秘 *mystêrion* とは、歴史的な文献である旧約預言書の言葉でありながら真理を内包し、「ヨナ書」を読むわれわれに対して内発的に働きかけてくる力に他ならない。

マクシモスがニネベを終末の普遍的集いの場としていることに関連し、これと同じ方向性を有するものとして、彼の次のようなアブラハム理解があろう。x)「現在、信篤く霊的なイスラエルに属している人々は、希望のうちに永遠なる王国を願っている。なぜなら主は父祖たちへの約束を果たされたからであり、霊的なアブラハムのうちにすべての国民を祝福し子としたからであり、信を通じて霊のうちに、アブラハムをすべての民の父としたからである」⁴³。

以上から、マクシモスは終末的な一致の像を描く際に、それが受肉という恩寵のわざに基づくものであることを力説することによって、肉体性を含めた人間性をまったく地平に置き、かつその一致が完全なものであることを明確にするために、異邦人の都ニネベにおける一致、あるいは父祖アブラハムの子孫としての一致を語っていることが理解される。その根底には、神の救いの普遍性に対するマクシモスの確信があると同時に、終末における人間の自由に発する抵抗の可能性に対する顧慮よりも、人間の思いを越えた場を一致の根拠として提供する、神の恩寵の豊かさへの信頼があるものと考えられよう⁴⁴。

Ⅷ 結. マクシモスの両意説の意義

以上をもって、マクシモスにおいて描かれる、万物の終末的到達像の諸相を提示することができたと考える。それは楽園の「善悪の知識の木」をも変容させ、ある意味においてそれを集いの中心に位置させるマクシモスの両期的視点によるものであった。彼の終末像は、時にニネベにおける、異邦人をも含めた普遍的一致の姿でその実を結ぶ。ちょうどキリストにおいて人間としての意志と神的意志とがまったく相矛盾することがなかったと同じように、終末的一致の姿にあってはすべてが神化を遂げ、内的な相剋は考えられない。このような意味で、文字通り「普遍的変容」としてのアポカタスタシス論が、内実として確かにマクシモスにおいて結実しているのをわれわれは確認することができる。それは、キリストにおける人間的意志と神的意志を二つながら完全なものとして認めつつ、その相互関係において完全なる一致が認められるとしたマクシモスの意志論、その単意説批判と軌を一にするものだと言える。そしてその根源にあるのは受肉＝恩寵の光であり、現実にキリストとして地上に到来した神人の姿に他ならなかったのである⁴⁵。

注.

- 1) J.-C. Larchet, *La divinisation de l'homme selon saint Maxime le Confesseur*, Paris 1996.
- 2) cf. H. Denzinger-A. Schönmetzer, *Enchiridion Symbolorum* §302.
- 3) マクシモスの神学に関しては、20世紀後半にその「再発見」が行われつつあり、研究文献は枚挙に暇がない。研究史を概観するのに便利なものとして、A. Nichols, O. P., *Byzantine Gospel: Maximus the Confessor in Modern Scholarship*, Edinburgh 1993. なお終末論については、B. E. Daley, S. J., *The Hope of the Early Church: A Handbook of Patristic Eschatology*, Cambridge 1991 から多くを得た。
- 4) 詳しくは、近刊の拙著「教父と古典解釈－予型論の射程－」（創文社）をご参照いただきたい。
- 5) H. U. Von Balthasar, *Kosmische Liturgie: Das Weltbild Maximus' des Bekenners*, Einsiedeln 1961²; 355 ff.
- 6) *Q. ad Thal.* Prol. ; PG 90, 257 C 6-260 A 10.
- 7) *Q. ad Thal.* 61. 636 B 7-D 17.
- 8) *ep.* 24 ; 91-609 c.
- 9) 前掲拙著第3部第5章を参照。
- 10) *Amb. Io.* 41 : 91. 1312. A 4-1312 A 15.
- 11) *Q. ad Th.* 64 : PG 90. 700 A 14-B 3, *Amb.* 10 : PG 91. 1165 D 10 ff. ; *Cap. th.* 47 : PG 90. 1100 B 12-C 4.
- 12) *Ps.* 59, PG 90. 857 A 4-15, *Myst.* 7 : PG 91. 685 B 12-C 6 ; *Amb.* 7 : PG 91. 1088 C 13 ff.
- 13) *Amb.* 7, PG 91. 1088 C 13 ff.
- 14) *Ibid.*, 1088 C.
- 15) H. J. マルクス「教父における人間理解」（岸英司編「宗教の人間学」81-110頁，世界思想社，1994年）。
- 16) cf. J. Gouillard(tr.), *Petite Philocalie de la prière du cœur*, Paris 1979.
- 17) *Expos. or. dom.* CCGS 23. 31. 81-5.
- 18) *Expos. or. dom.* CCGS 23. 71. 783-788.
- 19) *Liber asceticus* 24, PG 90, 929 C.
- 20) 大森正樹「エネルゲイアと光の神学」（創文社，2000年）を参照。
- 21) *Ambigua* 10, 17-31, PG 91, 1126-1170 ; *Centuriae Gnosticae* 2. 14, PG 90, 1132 A.
- 22) *Ambigua* 10, 17, PG 91, 1128 B.
- 23) *Centuriae Gnosticae* 2. 14, PG 90, 1132 A.
- 24) *Mystagogia* 6, PG 91, 684 AB.
- 25) *Mystagogia* 6, PG 91, 684 B.
- 26) オリゲネス「原理論」四 2. 4.
- 27) *Centuriae Gnosticae* 1, 92, PG 90, 1121 A.
- 28) *Ambigua* 21, PG 91, 1253 C.
- 29) 偽ディオニュシオス・アレオバギテスへの注解より：PG 4, 137 CD.

- 30) *Centuriae Gnosticae* 1, 93, PG 90, 1121 AB.
- 31) *Centuriae Gnosticae* 1, 89, PG 90, 1120 C.
- 32) *Q. ad Th.*, 63, CCSG II -165, 315-9.
- 33) *Ambigua* 7, PG 91, 1084 CD.
- 34) 前掲拙著第2部を参照。
- 35) *Quaestiones et Dubia*, 142; CCSG. 10, 101, 13-15.
- 36) *Mystagogia* 7, PG 91, 684 D-685 A.
- 37) ギリシア語七〇人訳テキストによる。ヘブライ語テキストとの相違については後述。なおアウグスティヌスも「神国論」第18巻44章でこの「三日」と「四十日」のテキストの相違について触れている。
- 38) *Q. ad Th.*, 64, CCSG II -225, 612-9.
- 39) *Q. ad Th.*, 64, CCSG II -225, 624-6.
- 40) *Q. ad Th.*, 64, CCSG II -225, 656-72.
- 41) *Q. ad Th.*, 64, CCSG II -225, 672-84.
- 42) P. M. Blowers, *Exegesis and Spiritual Pedagogy in Maximus the Confessor*, Notre Dame, Indiana 1991; 128.
- 43) *Q. ad Th.*, ; PG 90. 328 C 2-5; cf. B 8-C 7.
- 44) B. E. Daley, 'Apokatastasis and (Honorable Silence) in the eschatology of Maximus the Confessor', in: F. Heinzer / C. Schönborn (edd), *Maximus Confessor* (Fribourg 1982) 309-339; 328. n. 84.
- 45) マクシモスの両意説そしてキリストの神人性が、人文主義=古典学に対して披く地平については、前掲拙著を参照。

※本稿は、平成12~13年度科学研究費補助金奨励研究(A)「中世東西地中海世界の神学体系を基礎とした西洋古典文献伝承史の再構成」による研究成果の一部である。関係各位の方々に感謝申し上げます。